



収録作品

女余りの途上国で合コンに参加したら、
飢えた少女しか来なくて

精液ワクチンを求めて狂った女たちに監禁されて
ペニバンで無理やり絞り出されるんだ

■あらすじ

発展途上の某国。

経済は良くないものの、物価が安い上に、顔もアジア系だから日本人と遜色ない。近年は「女余り」と囁かれており、若者の七割が女性とされる。

首都に行けば、もっと男女比は偏っていた。

仕事で長期滞在する日本人・コウタ。

そろそろ彼女が欲しくなり、知人の提案もあつて合コンに参加する。

カラオケのワンルームで相手を待つコウタ。

しかし、予想外の人数が集まり、しかも全員が●●歳くらいの少女だった。

一 貧しい少女たち

「あのお、此処で良いんでしょうか？」

「あつ、参加者だね？ うん、入ってきて」

「し、失礼しますっ」

カラオケのワンルームで合コンを開いた俺。

まずは一人目の参加者が入ってくる。

現地の言葉にも随分と慣れたもんだ。

入ってきた女の子に対して俺は、ネイティブに席を案内した。

女の子……そう、女の子だった。

（おいおいおい、何歳なんだよ……）

内心で驚く。相手の女性が思いの外に若い。

というか若すぎる。化粧をしても明らかかな童顔に、身体は完全なる未発達だ。

顔が幼くて背も低く、薄着からは膨らみが窺えない。確かに日本に比べて小柄な

印象だけど、それにしてもの体型だった。

なにより、格好が学生服だ。ワイシャツにスカートと……俺は固まった。

今回の合コンへと参加するに辺り、俺は地元で人気らしいローカルなマッチングサービスを利用している。

割とメジャーな企業が主催する合コンだから、信頼して使ってみただけ……
良いのか、これは？ どう見ても……

あ、でも、この国には、そういう年齢制限っぽいのが無かったような気がする。
うーん。しかし、もつとオトナっぽい子は居なかったものか……

こういうのはガチャ性があるから、仕方ないと言えば、それまでだ。

まあ、参加者は他にも来るだろうし、一先ずいまはこの子と仲良くしよう。

と、内心で思案していると、相手の少女が心配そうに俺を見つめているのに気付く。
気を取り直して「ああ、ごめん」と返すと、少女は照れ顔で手を差し出してきた。

「あの、その、リ、リンと言います」

「あ、う、うん。俺はコウタだよ。よろしくね」

「は、はひっ……」

握手する。リンちゃんの掌は、汗で濡れ切っていた。

しかも、色黒寄りでもハッキリと分かるくらいに顔が真っ赤だ。

凹型に並ぶ椅子で俺と向かい合うように座る。

可愛らしく内股になり、小さく作った拳をキュツと鳴らす。



異性と顔を合わせられないのだろうか。視線が絡むたびに慌てて俯く。でも、俺が視線を外すと、すぐにチラチラ視てきたり……

再び目が合い、リンちゃんが逃げる。俺は、ウブな様子に思わず笑った。

「なんだか……随分と緊張してるっぽいね」

「あう……ううっ……ごめんなさい……こんな私じゃダメ、でしよるか？」

「あ、いや、そんなことないよ。可愛くて良いじゃん」

「可愛ッ!? そ、そんなこと、な、あ、あうううっ……!!」

可愛いと言われたリンちゃん。赤面は一瞬で最高潮に達した。

小動物のように顔を伏せて口元を両手で塞ぐ。

垣間見える耳の裏から、首までもが真っ赤に染まっていた。

ここら辺では、シャンプーやヘアオイルは贅沢品だ。

リンちゃんは、恐らく水洗いしかしていないのだろう。ショートカットの強気な髪質から、ふわりと人間的な香りが俺にまで漂う。シャンプーや香水の無い純粹な体臭……俺の心を攪った。

日本人では整形しないと実現しなさそうな大きくクリクリとした目が、チラリと横から俺を覗く。俺はロリコンじゃないけど、純粹にリンちゃんのレベルが高くてドキッとする。

此処まで初々しいと、なんだか俺まで照れちゃうな。

合法だってんなら、この子を狙うのも全然アリかもしれない……

ぴっちり着こむ制服から、リンちゃん乳房が如何に未熟か窺える。

未発達な乳房……巨乳フェチと思ひ込んできた俺に動揺が走る。

また、スカートの奥が一瞬だけ垣間見えた気がする。白の、無骨で清楚な一品だ。

これぞ無垢というものだろう。なにも着飾らない、オンナの真実である。

ムクムクと……静かに俺の情欲が早速擦られていた。

誤魔化すように笑ってリンちゃんを励ました。

「ごめん。追ひ込むつもりは無いんだ」

「い、いえ、謝らないで下さい。あの、私が悪いんです。その、男性と……あまり関わったことが無いもので……お父さんくらいしか……」

「あー、この辺はガールズスクールばかりだからね、別に珍しくないと思うよ」

「……………」

「まあ、じゃあ、その、俺で慣れたら良いよ。男のこと。ね？」

「い、い、良いんですかッ!？」

「もちろん。君さえ良ければね」

「ぜ、全然大丈夫ですッ、は、初めてで至らない所とかあるかもしれませんが!!」

「うんうん。にしても、参加者はリンちゃんだけなのかな？ だったら……」
合コンの開始時間は過ぎていているのに、未だリンちゃんしか来ていない。

何人が来るのかも知らされてないし、リンちゃんだけというのなら、それで良い。
何処か別の場所に移動しようか？

と、食事にでも誘おうとした、次の瞬間。再びカラオケの扉が開いた。

「あのく、コウタさん……でしようか……？」

「えっ？ あ、ああ……そうだよ」

「失礼します」

「こ、こんばんは」

「よ、宜しく願いしますう……」

どうやら、リンちゃんだけでは無かったようだ。他の参加者が入室してくる。

だが、入ってきた相手は三人組の……またしても少女だった。

今度こそ俺の思考が停止する。啞然と口を開けていたに違いない。

三人とも同じくらいの年齢だろうか。リンちゃんとも同じくらい……もしくは、

リンちゃんよりも更に若いかもしれない三人組。リンちゃんと同様に学校の制服を着こんでおり、おどおどと慣れない足取りでテーブル前へと並ぶ。

柔らかいスカートを靡かせながら、俺にチラリと視線を送ってきた。

「……………」

俺の鼓動が急速に昂っていくのが分かる。

アメリカ的なスリム&長身のモデル体型こそ少ないものの、この国は別の角度で宝庫と言って良いくらい、全体的に女の子が可愛い。美人というより、可愛い系だ。しかも、身長が日本人より平均10cmは低く、どの子も揃って童顔系……

例えその気が無かったとしても、こんなに若くて可愛い四人の少女と密室というシチュエーションには胸の煩いを抑えられなかった。

(勃ってきた……この状況で……)

「ライです……あの、その、は、初めてです……!!」

「サイラです。わたしも初めて……です」

「う、あ……あ……ニーニヤ……です……」

「う、うん。宜しくね」

両手を下腹部でV字に、整然と並びながら一人ずつ挨拶してくる。

その顔は「初めて」らしく緊張した朱色がアリアリと拡がっていた。

三人ともリンちゃんよりも背が低い。

リンちゃんと同じく化粧すらしておらず、真っ赤な頬が露骨に浮き出ている。

やはり俺と顔が合わせられないようであり、目の置き所に困っている様子だった。

「……………」

俺の言葉を待つように、ジッと唇を閉ざして緊張する。

四人とも女学生とは。一体、どういうマッチングサービスなんだよ。という呆れを抱く暇も無かった。

何故なら、俺の「座って」という指示に、三人が群がってきたからだ。

俺を挟むように、ライちゃん、サイラちゃんが左右へと腰を下ろしてくる。

距離にして拳一つ分という至近距離だった。

無垢な香りが更に濃度を増す。ドキッと胸が鳴り、股間に熱が集中していく。

ちよつとマズいと思ひ、開いていた膝を閉じようとした時……………」

ニーニヤと呼ばれた、一番おどおどしていた筈の少女が俺の股座へと屈んできた。

これにはリンちゃんも驚く。反対側の座席で言葉を失っていた。

「ちよ……………」

左右を二人の女の子に挟まれた。というか、三人の少女に囲まれた!!

ニーニヤが太腿に手を添えては、あざといくらいの上目遣いで俺を窺ってくる。

隙間を埋められた所為で、もう膝を閉じることには出来ない。俺は戸惑った。

もしや三人は、そっち系を生業とするオンナなのかなと思ったけど、その表情が

「違う」と訴えていた。

「イヤ……でしたか？」

「イ、イヤではないけど。寧ろ、本音を言えば嬉しいというか」

「……………ッ!!」

三人も耳まで真っ赤にする。明らかに、こうした行為に慣れていなさそうだった。彼女たちは必死なのだ。俺の気を引こうと……

「でも、その、他の男も来ると思うから、俺だけが独占って訳にもいかないし」
「……………」

俺がセツティングした訳じゃないから、どんな男が来るのかは分からないけど。と、内心で考えてると、リンちゃんが首を傾げながら言う。

「あ、あの……男性は、コ、コウタさんだけですよ？」

「えッ!？」

「そう聞いてます」

「マ、マジか」

なんだ、相手を事前にチェック出来たのか。

というか待ってほしい。俺一人に、女の子が四人なのかッッ。

いくら女余りの地区とはいえ、こんな条件で女子たちも納得するなんて凄い話だ。いやいや、いまはそれよりも、ペニスの勃起が抑えられなくて……

「うあッ……!？」

「あああッ、コウタさんのッ……ってか、男性の……本当に大きくなるんだ……」
それは、ニーニヤちゃんの眼前に聳え立ってしまったていた。

緩めのズボンを履いてきた為に、余計に際立って見える官能的な膨らみ……
口ぶりから、知識しか持っていないらしく、男性的な反応に目が釘付けである。
ニーニヤちゃんだけじゃない。

ライちゃん、サイラちゃん、そしてリンちゃんまでも目を見開いて喉を鳴らした。
間近に位置するニーニヤちゃんが震える唇で問う。

「えと、その、こ、これって、興奮してるってこと、で、ですよ、ね……?」

「いやあ……」

興奮というよりは、この時点では正直に言っただけ戸惑いの方が強いんだけど……
だけど、それは野暮と感じた俺は、そっぽ向きながら頷いた。

群がる三人とは一步の距離を置いているものの、いつの間にかリンちゃんまでも
席を立てて近くまで来ている。朱い顔に、濡れた艶やかな唇、俺から一瞬も視線を
外そうとせず、何度も口に溜まった唾を飲み込む音が聞こえていた。

行為が確実に始まる空気感である。男の本能がジクジクと呻き上がる。

ああ、こんな幼い女の子たちと……しかも5Pだなんて……

「え、と……ど、どうすれば……は、初めてで……」

みんなが俺を視る。いまにも泣き出しそうな潤んだ瞳で……断われる筈もない。俺は、初対面の少女に、勃起した股間を見せつけては、信じがたい指示をした。

「さ、触って良いよ。好きなようにね。オトコのカラダを勉強したいでしょ」

「わ、分かり、ました……」

「……ッ」

ヒトつて、こんなにも真っ赤になるのか。というくらいニーニヤちゃんの赤面が一線を画している。顔から湯気まで出てるではないか。

聞けば、四人は私生活で異性との関わりが殆んど無いという。

なのに、様々な過程をすっ飛ばしてのコレなのだから、パニックも仕方ない。

だけど、それにしても、こんなに恥ずかしそうにしながら、俺のペニスを衣服の上からとは言え、円を描くように撫でてくれていた。

俺より二回りは小さいであろう掌で……何度も、何度も……

「うッ……」

異性に触ってもらうって、どれくらい振りだろう。

ずつとご無沙汰だったから……ズボンの上から撫でられるだけでも出そうだ。

というか出る。こんな、現地の可愛い少女たちに囲まれてたら、絶対に……

「コ、コウタさん、き、気持ち良いん、ですか？」

「あ、ああ、ニーニヤちゃんの手が優しくて。ずっと味わっていたい気分だよ」

「ふ、ふあ……嬉し過ぎて……な、泣きそう、です……」

というより、もうニーニヤちゃんは泣いていた。

俺に褒められただけなのに、この上ない悦びを感じていた。

後で知った話だけど、この国では日本人男性が極端にモテるらしかった。

金持ちのイメージが強いのだろう。実際に賃金の格差は明らかだ。

俺なんて単なるヒラのリーマンでしかないのに、それでも平均年収が十万円にも満たない本国では、かなりの高所得者として見なされている。

容貌も本国と大差が無いし……ここでは日本人が引っぱりだこのようだ。

(そもそも、圧倒的な男不足の地区だから、金とか関係なく男はモテるんだけど)

子には豊かに暮らしてほしいという想いから、親も積極的に日本人との繋がりを渴望している。今回の合コンについても、親公認に依るものだった。

だから、積極的……というより、もはや奪い合いだった。

「私も……触って良い、ですか？」

「えっ、ライちゃんもツ!？」

「私も、お、お勉強したいです……」

「……分かった。良いよ」

「ふあ、ああああ……こ、これが男性の……ビクビクしてます……」

「ああああつ、ふ、二人に同時に触られるなんてツ……!!」

ニーニヤちゃん、ライちゃんの、可愛らしい繊手が規則正しく円を描き続ける。

余計な言葉なんか要らず、やがて静寂が室内を支配する。静かだけど、エッチな四つの吐息やら空気が漂っている。ニーニヤちゃん、ライちゃんが二人で愛でつつ、感じる俺の顔をリンちゃん、サイラちゃんが視姦していた。

「はあ、はあ、はあ、コ、コウタ、さん……気持ち良さそう……」

「コウタさんの顔を視てるだけで私までへんな気持ちになりそう、です……」

異性の性的興奮に中てられており、俺を視ながら放蕩に耽る二人。

ニーニヤちゃんも、ライちゃんも、俺のペニスを撫でてるだけで感じていた。

服越しつてのがそそられる。強すぎない二つの刺激が官能の陰陽を螺旋する。

じわりじわりと、快感が滲んでくるようだ。

とうに下着の中は我慢汁で哀れになっている。陰茎も痙攣しまくっており、気を張らなければ、いまにも達してしまうことだろう。自然と俺の腰が浮いた。

そこに、もう一つの刺客が加わってくる。ビクンと肉棒が唸る。

俺の横顔を視ていたサイラちゃんも手を伸ばしてきたのだ。

「う、あッ……」

「はあ、はあ、はあっ、わ、私も……気持ち良くします……」
サイラちゃんも争奪戦に加わってきた。

三つの手が滔々と屹立を撫でる。異性の身体を学ぶように、探り探りに手が這う。亀頭を撫でては、その手が下の方……陰囊へと伸びたりもしている。睾丸を優しく触り、その形を学んでいた。

円を描いていた動きも、三人となれば窮屈なので動きが不規則になる。

これはこれで良い。一人が亀頭付近を刺激しながら、誰かが睾丸を愛でてくる。付け根にも誰かの手が走り、あらゆる快感が突き刺さって止まない。必死に射精を抑える俺は、いつの間にか全身を汗だくにしていた。

勿論、こんな快感は初めてだ。

三人から同時に責められるのが、こんなに気持ち良いなんて……

また、俺を左右から挟むライちゃん、サイラちゃんが更に身体を寄せてくる。

まだ恥じらいがあるのか、胸を押し付けたりとかは無いんだけど……

と思ったら、サイラちゃんの胸が僅かに俺の肩へと触れる。

サイラちゃんも貧乳だから、柔らかい感触とかは無い。けど、それでも男として興奮せざるを得ない。未熟な乳房の感触が心地良かった。

しかし、サイラちゃんに目を向けると、サツと身体を離されてしまう。嫌という訳じゃなくて飽くまで異性への……俺への照れだった。

それを証拠に、サイラちゃんも真っ赤にしている。本物の処女、生娘だから。

あまりに初々しくてジリジリと脳が焦がれていく。情欲が一気に引き立てられた。

「うっ、あああつ、ちよ、ちよつと待って。このままだと出ちやうから……」

「で、出ちやう……?」

「え? あ、ああ、気持ち良さが限界に達すると、出ちやうんだよ。精子が……」

「あッ……」

知識としては把握してるらしい三人組。俺の絶頂を知り、余計に緊張感が走る。

言われてみれば、さつきよりも猛りが大きくなってる気がする……と、胸を打つ。

ズボン及び下着の湿りも伝わり、俺の限界を肌で感じていた。

このまま出すのは、あまりに情けない。替えのパンツも無いし……

という訳で三人の手が離れると、俺は僅かに腰を浮かせてズボンを脱いで見せた。

「~~~~~ッ!!」

我慢汁で不快感に満ちていたズボンが剥がれて、解放的になったペニス天井を

見上げる。パンツで擦れた亀頭が皮を剥き出しになり、生娘たちを威圧するが如く

真っ赤な亀頭がギラギラに主張していた。

息を呑む三人組。いや、四人組。口を半開きに魅入られていた。

「初めて見る？」

四人が黙って頷く。

「父のも……視たこと無いですから……」

「わ、私も初めて、です……」

「マジか」

「こ、こんなに大きいなんて知りませんでした」

「みんなのお陰だよ。俺も、こんな興奮したこと無いから」

「私たちでも興奮してくれてるんだ……嬉しい……♥」

「良かったら、手で……」

「は、はいッ!!」

既に射精寸前のペニス。早く絞れと言わんばかりに、ビクンビクンと何度も怒り狂っている。経験が無かるうとも、生娘たちも本能的にオーガズムを予感しており、ラストスパートに向けて一人ずつ手に取っていく。

まずは正面のニーニヤちゃんが陰茎を堂々と掴む。

続くように、ライちゃん、サイラちゃんの手も伸びてきた。

一本のペニスに、三人の少女の手が群がる。至高だった。

「うあああッ!! も、もつと強く握ってほしい。出来れば……」

「は、はい」

ゆつくりと三人分の手が動き出す。ゾクゾクゾクツと背筋に電流が走った。

気持ち良い。出そうになる。でも、もつと味わっていたくて……

そういえば、左右の二人が俺の身体に凭れ掛かっている。今度は、目が合っても離れようとしなかった。

というより、ペニスに手が癒着したように、離れられなかったのかもしれない。

サイラちゃんも、ライちゃんも……緊張で全身を汗まみれにしてるのに、それを拭おうともせず、なによりも俺の快楽を優先してくれた。

「クチュクチュ言ってます……いっぱい、透明の、なにかが溢れてきます……」

「はあ、はあ……コウタさん……気持ち良さそうな顔してる……嬉しい……♥」

「なんだか私までヘンになっちゃいそうです、男性の、握ってるだけで……!!」

それが嬉しくてオーガズムの津波がドンドンと亀頭を叩きつけてくる。

でも、まだだ。まだ味わっていたい。三人の少女によるハーレム手コキ……!!

と、その時。俺は、一人だけ蚊帳の外だったリンちゃんに目を向けた。

「あッ、んッ、ふうッ、コ、コウタ、さん……あんっ、ふっ……」

「リ、リンちゃんッ!?!」

「ふあ、ご、ごめん、なさい……止まらなくて……!!」

蚊帳の外で行為を眺めていたリンちゃん。気付けば、オナニーに馳せていた。

スカートに手を入れながら、パンツを引っ掻くように強く……ガリガリと……

俺と目が合い、泣きながら謝るも、その手は止まらなかった。

俺の顔とペニスを何度も交互に肴としながら、濡れたパンツで音を立てている。

こんなに可愛いリンちゃんが……俺をオカズに!!

「う、うあ、で、出るッ、あああああッ!!」

それを認識した瞬間、快感が一瞬で倍増する。

止めること出来ずに、俺は恋焦がれた蟠りをニーニヤちゃんに……そして、その

奥でオナニーに溺れるリンちゃんへと吐き出すのだった。